

# プレゼンテーション資料作成作業への Rule of Three 適用支援

轟 眞市\* (物質・材料研究機構 光材料センター)

プレゼンテーション技術を論じる際に、必ず言及されるものの一つに "Rule of Three" がある。何かを列挙する時には、その数を3つにすると印象に残りやすいし、重要な事項は3回繰り返して提示するのが良い。

図1は、筆者が現在用いているプレゼンテーションのスタイルである。1995年に受講したプレゼンテーションセミナーでこのノウハウを仕入れて以来、ずっと貫いている。ポイントは、話題が一区切りするたびに、まとめを提示するとともに、話の流れを確認する点にある。

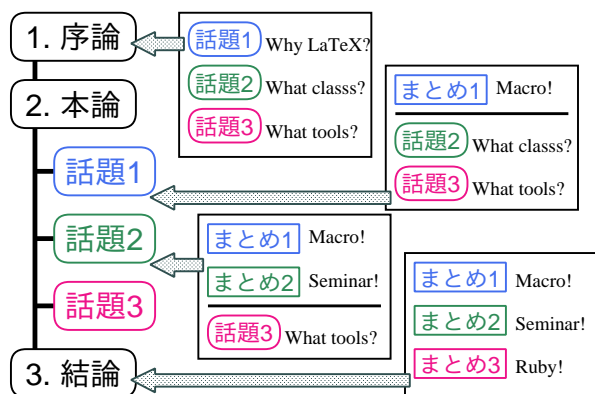


図1: Rule of Three を適用したプレゼンテーションの構造(左)と、それに用いるスライド(右)。

しかしながら、この最も基本的なスタイルを実践している人の数は、筆者の見聞きする範囲では非常に少ない印象がある。その理由を考えてみるに、学校教育でプレゼンテーション技術を学んでこなかったことも挙げられるが、それ以上に、プレゼンテーションソフトウェアが、Rule of Three の適用を支援する機能を有していない(もしくは利用者が活用していない)ことが最大の原因であると思う。支援機能なしに手作業でこのスタイルを実装するのは、大変に手間がかかるし、推敲もはかどらない。

幸いなことに、 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$  はマクロ機能を備えているし、ソースファイルをスクリプト言語で自動生成することもできる。筆者が構築した Rule of Three 適用支援環境を紹介する。

\*[http://www.geocities.jp/tokyo\\_1406/TODOROKI.Shin-ichi@nims.go.jp](http://www.geocities.jp/tokyo_1406/TODOROKI.Shin-ichi@nims.go.jp)

## 執筆環境

パソコン OS:	Debian GNU/Linux 5.0.2 (lenny)
文書クラス:	seminar.cls + prosper.cls
補助ツール:	latexmk, Ruby

ソースファイル執筆 Ruby スクリプトでテンプレートを自動生成している。引数指定により、和文、英文、単純3部構成(図1、10~15分程度の発表)、複合3部構成(3つの話題がそれぞれ3つの項目からなる構成。30分以上の発表)を作り分けている。テンプレート内には、繰り返し登場する文字列のマクロ定義が記述してある。

seminar.cls で執筆や縮刷版作成を行い、prosper.cls で発表用 PDF ファイルを生成させている。両者が共存する様にソースファイルを加工するスクリプトを Makefile から呼び出している。

## 作成例

単純3部構成:	文献 [1] 第1章 (途中のまとめは省略)
複合3部構成:	文献 [2]
ポスター:	文献 [3]

これらの例において筆者は、すべてのスライドに、各話題を象徴する「見出し」を配置し、聴衆に話の流れを意識させる様にしている [1, 4]。このような工夫を実践する人が増え、わかりやすい発表が増えることを筆者は切に願っている。

## 参考文献

- [1] 轟 眞市: “プレゼンテーションと情報管理” (2004). <http://pubman.mpg.de/pubman/item/escidoc:28491>
- [2] 轟 眞市: “だからセルフアーカイビングはやめられない!”, 第1回 SPARC Japan セミナー 2009 「研究者は発信する - 多様な情報手段を用い、社会への拡がり求めて」 (2009). 講演ビデオ公開中 ↓ <http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2009/20090625.html>
- [3] 轟 眞市: “ファイバビュースの自然停止に伴う2重周期的空孔列の生成”, 日本セラミックス協会 2006 年年会講演予稿集, 東京都目黒区, p. 220 (2006). (2P134). <http://pubman.mpg.de/pubman/item/escidoc:28396>
- [4] 轟 眞市: “セレンディピティを高めるプレゼンテーション技術 (連載全6回)”, 工業材料, 55, 8~翌3月号 (2007~2008). <http://pubman.mpg.de/pubman/item/escidoc:28426>